2025年産「アルプス米」てんたかく・てんこもり栽培こよみ（JA米）

アルプス農業協同組合
アルプス農協管内農業技術者協議会

てんたかく

収量構成の目安

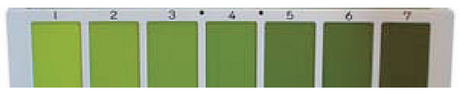
（600kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数（本）	500	㎡当たり籾数（粒）	30,000	玄米千粒重（g）	23.5
一穂籾数（粒）	60	登熟歩合（%）	85		

ステージ：4月 育苗期／5月 5/5 田植え 活着期 有効分げつ期／6月 無効分げつ期／6/25 幼穂形成期／7月 穂ばらみ期／7/17／8月 登熟期／成熟期 8/21／9月

作業日程の目安（5/6 田植えの場合）

浸種 4/1 → 播種 4/12 → 搬出 4/15 → 田植え 5/5 → 除草剤散布 → 軽い田干し → 溝掘り 5/23～25 → 中干し 5/30～6/4 → 加里散布 → 穂肥① 6/25 → 穂肥② 7/5 → 出穂期 7/17 → 防除① → 防除② → 防除③ → 落水 8/14～16 → 刈取り 8/21



葉色の推移（葉色カラースケール）：4.0 ／ 幼穂形成期 4.0～4.5（4.0を下回らない）／ 穂揃期 4.2～4.5

7月上旬 一斉草刈り

品質向上は「土づくり」から

土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

秋耕しの実施
稲わらは秋のうちに5～10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。

適正な乾燥調製
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。
- 胴割れ防止のため90%までに刈り終える。
- 籾の黄比率80%で刈り取り開始。

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

基本防除の徹底（3回必須）
- 3回目は傾穂期
- 2回目は穂揃期
- 1回目は出揃期

出穂後20日間の湛水管理

草刈りの徹底
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は幼穂長1～2㎜と葉色を確認してから施用する。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 6／20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。
- 中干しは強すぎないように注意する。
- 田植後4週間までに開始する。

中干しは適期に開始
- 5mに1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。

田植え
- 搬出直後から換気の徹底。
- 田植時期に応じた計画的な育苗を行う。

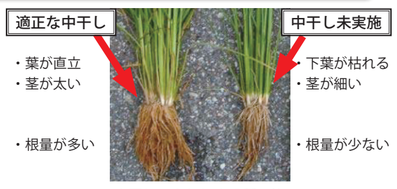
健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
- 確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

適期の中干し開始・適度な中干し実施

○中干しは田植後４週間までに遅れず開始することで根の伸長を促進します。

○中干しの効果を高めるため、中干しの前には溝掘りを確実に実施しましょう。



中干しの有無による稲の姿

乗用管理機での溝掘り

防除の徹底で被害を防止!!

○防除は適期に行い、防除間隔は７日間を目安とする（10日以上あけない）。
○畦畔等のイネ科雑草の穂が出る前までに草刈りを行う。○麦あと等の不作付地は、大豆、園芸作物、緑肥等の栽培を行う。

病害虫防除体系

【育苗基本防除】・苗箱施薬剤は、**規定の薬量（50g/箱）を厳守**し、箱全体に均一に散布する。

薬剤名	散布量	使用時期	対象病害虫
ブーンレパード箱粒剤	50g/箱	播種時（覆土前）～移植当日	いもち病、紋枯病、イネミズゾウムシ、イネドロオイムシ、白葉枯病、もみ枯細菌病、ツマグロヨコバイ、フタオビコヤガ、ニカメイチュウ、イネツトムシ

【本田基本防除】・粉剤、液剤体系

防除時期	随時防除 紋枯病の発生が多い圃場 てんこもり：出穂７日前頃	基本防除 出穂期	基本防除 穂揃期	基本防除 傾穂期	随時防除 カメムシが多い圃場 傾穂期後
粉剤	バリダシン粉剤DL 3～4kg/10a	ビームモンカット スタークルF粉剤5DL 3～4kg/10a	ラブサイドキラップ粉剤DL 4kg/10a	スタークル粉剤DL 3kg/10a	トレボン粉剤DL 3～4kg/10a
液剤	バリダシン液剤5 150L/10a 1,000倍	モンカットフロアブル＋スタークル液剤10 150L/10a 1,000倍	ラブサイドK2フロアブル 150L/10a 1,000倍	スタークル液剤10 150L/10a 1,000倍	トレボン乳剤 150L/10a 2,000倍
対象病害虫	紋枯病	紋枯病、いもち病（粉剤）、カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ等	いもち病、カメムシ類、ウンカ類（粉剤）	カメムシ類、ウンカ類、ツマグロヨコバイ等	カメムシ類

除草剤散布は遅れずに

雑草防除体系

●水深５㎝程度を保ち散布する。
●除草剤散布後7日間は落水やかけ流しをしない。

雑草の発生が少ない圃場：一発処理

- **カチボシ・１キロ粒剤51・Lジャンボ**
  使用時期：1キロ粒剤 移植時～ノビエ2.5葉期／ジャンボ 移植直後～ノビエ2.5葉期（移植後30日まで）
- **クサウェポン・１キロ粒剤・ジャンボ**
  使用時期：1キロ粒剤 移植時～ノビエ3.5葉期／ジャンボ 移植後1日～ノビエ3葉期（移植後30日まで）
- **ベッカク・１キロ粒剤・ジャンボ・豆つぶ250**
  使用時期：1キロ粒剤 移植時～ノビエ3葉期／ジャンボ・豆つぶ 移植後3日～ノビエ3葉期（移植後30日まで）

雑草の発生が多い圃場：体系処理

体系①：ノビエ対策
- **マーシェット・１キロ粒剤**
  使用時期：移植後３～５日（移植後30日まで）
- ▼ **ベッカク・１キロ粒剤・ジャンボ・豆つぶ250**
  使用時期：マーシェット散布後7～10日（移植後30日まで）
- ▼ 【中干し前に使用】**テッケン・１キロ粒剤・ジャンボ**
  使用時期：移植後15日～ノビエ4葉期（収穫60日前まで）

体系②：ホタルイ対策
- **ピラクロン・１キロ粒剤**
  使用時期：移植同時で使用（ノビエ1.5葉期まで）
- ▼ **クサウェポン・１キロ粒剤・ジャンボ**
  使用時期：ピラクロン散布後7～10日以内（移植後30日まで）

体系③：中期剤タイプ
- **ピラクロン・１キロ粒剤**
  使用時期：移植同時で使用（ノビエ1.5葉期まで）
- いずれか１剤
- 【中干し前に使用】**ワイドショット・１キロ粒剤**
  使用時期：移植後15日～ノビエ4葉期（収穫45日前まで）
- または
- 【中干し前に使用】**テッケン・１キロ粒剤・ジャンボ**
  使用時期：移植後15日～ノビエ4葉期（収穫60日前まで）

雑草が残った場合

ノビエが残った場合
- **クリンチャージャンボ**
  使用時期：1kg/10a施用 移植後7日～ノビエ4葉期（収穫30日前まで）
- **トドメMF１キロ粒剤**
  使用時期：移植後14日～ノビエ5葉期（収穫50日前まで）

広葉雑草が残った場合
- **バサグラン粒剤**
  使用時期：移植後15日～収穫45日前まで

ノビエ・広葉雑草どちらにも効果あり
- **トドメバスMF液剤**
  使用時期：移植後15日～ノビエ6葉期（収穫50日前まで）

クサネムに効果あり
- **ロイヤント乳剤**
  使用時期：移植後20日～ノビエ5葉期（収穫45日前まで）

土壌に応じた適正な施肥量

てんたかく 施肥基準（5/6植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系 肥料名	施用量(kg/10a)	分施体系 基肥 肥料名	施用量(kg/10a)	穂肥 肥料名	施用量(kg/10a) 1回目	2回目
砂壌土 壌土	エコ 早生専用	40	基肥206	40	追肥3号	10	13
半湿田 黒ボク土		35	基肥206	35		10	12
粘質土		30	基肥206	30		10	10

てんこもり 施肥基準（5/8植え）※側条施肥の場合

土壌区分	基肥一発体系 肥料名	施用量(kg/10a)	分施体系 基肥 肥料名	施用量(kg/10a)	穂肥 肥料名	施用量(kg/10a) 1回目	2回目
砂壌土 壌土	LPss 晩生専用	45	基肥206	45	追肥3号	13	13
半湿田 黒ボク土		40	基肥206	40		10	12
粘質土		35	基肥206	35		10	10

●てんたかく・てんこもりは適正な生育量を確保するために、基肥は基準とする量を施用する。
●てんたかくは、基肥一発の場合、追加穂肥を原則施用しない。

積極的に利用しましょう！
◎高品位・低コスト生産にカントリーエレベーターを

てんこもり

収量構成の目安

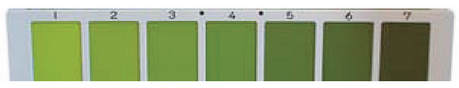
（600kg／10a）

収量構成	目安	収量構成	目安	収量構成	目安
㎡当たり穂数（本）	450	㎡当たり籾数（粒）	31,000	玄米千粒重（g）	22.5
一穂籾数（粒）	70	登熟歩合（%）	85		

ステージ：4月 育苗期／5月 5/8 田植え 活着期 有効分げつ期／6月 無効分げつ期／7月 7/12 幼穂形成期 穂ばらみ期／8/3／8月 登熟期／成熟期 9/19／9月／10月

作業日程の目安（5/8 田植えの場合）

浸種 4/5 → 播種 4/15 → 搬出 4/18 → 田植え 5/8 → 除草剤散布 → 軽い田干し → 溝掘り 5/29～31 → 中干し 6/5～10 → 加里散布 → 一斉草刈り 7月上旬 → 穂肥① 7/11 → 穂肥② 7/21 → 随時防除 → 出穂期 8/3 → 防除① → 防除② → 落水 9/12～14 → 刈取り 9/19



葉色の推移（葉色カラースケール）：4.0 ／ 幼穂形成期 4.0～4.5（4.0を下回らない）／ 穂揃期 4.2～4.5

品質向上は「土づくり」から

土壌改良資材の施用基準

資材名	標準施用量(kg/10a)
粒状ケイカル	200
元気	100
シリカロマン	100
シンキョーライトP	100

秋耕しの実施
稲わらは秋のうちに5～10cm程度浅めにすき込む

管理のポイント

土づくり
- 稲わらの腐熟促進のため、秋耕しを行い、排水溝を掘る。
- 土づくり資材や堆肥を施用する。

適正な乾燥調製
- 1.9㎜のふるい目を使用し、選別を徹底する。
- 水分14.5～15.0%に仕上げる。
- 籾黄化率85～90%程度で適期に刈り取る。

適期収穫
- フェーン時はあらかじめ入水する。
- 刈取り予定日の5～7日前まで間断かん水を行う。

収穫までの水管理
- 生育ステージに合わせて防除を実施する。

基本防除の徹底
- 2回目は傾穂期
- 1回目は穂揃期

出穂後20日間の湛水管理

草刈りの徹底
- 7月上旬までに畦畔や雑草地の草刈りを終える。
- 葉色が淡い場合は、出穂前に追加穂肥を施用する。
- 2回目穂肥は1回目穂肥から10日後を目安に施用する。
- 1回目穂肥は幼穂長1～2㎜と葉色を確認してから施用する。

適正な穂肥

幼穂形成期から飽水管理

中干し後は幼穂形成期まで間断かん水
- 6／20頃に「エスアイ加里らくだ」または「珪酸加里」を施用する。
- 中干しは強すぎないように注意する。
- 田植後4週間までに開始する。

中干しは適期に開始
- 5mに1本を目安に溝を掘る。

溝掘りは確実に
- 活着後は、浅水管理をする。

田植え
- 植付深さは3㎝。
- 植付本数は株当たり3～4本。
- 栽植密度は坪当たり70株を確保する。
- 苗箱施薬による防除を実施する。
- 基肥は基準量を守る。

健苗育成
- 代かきは、均平に努め、練りすぎに注意する。
- ゆっくりと耕起し、作土を15㎝以上確保する。

耕起・代かき
- 確実に施用する。
- 秋施用ができなかった場合は、土づくり資材を

土づくり